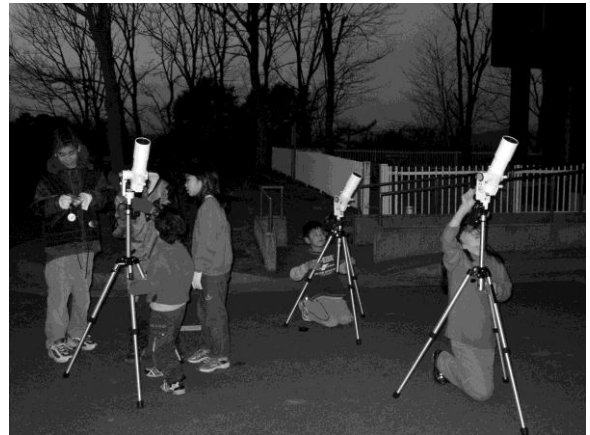


ほしぞらリピーター Star Kids の活動紹介

Star Kids は、国立天文台主催の「君が天文学者になる4日間」に参加した高校生が知り合いに呼びかけてできた星好き仲間のネットワークである。そのイベントは2002年8月、StarKids 1回目開催は2002年12月、指導者がいない中で天文台研究員に子どもたちが直接アタックして教えを受けたり、観測体験をさせていただいたり、次々に星空の不思議さ面白さに心惹かれた子どもたちの星空への展開は、10年目となる今も尽きることがない。



Star Kids の構成：3歳から75歳までの子ども、大人、（ファミリー単位が主）
これまで大阪・兵庫・京都・香川の14家族の参加があった。

活動のスタイル：天体観測を含めた野外、屋内活動。主に泊りがけのイベントを計画し、呼びかける。
興味ごとに呼びかけ人が違うが近年は子どもたちが計画をすることが多い。

場 所：主に西はりま天文台、他に奥びわこキャンプ場。
利用した施設としてはほかに、星の子館、姫路科学館、大阪市立科学館、明石市立天文科学館
西脇テラドーム、ダイニックアストロパーク、彦根市こどもセンター天文台、やまがた天文台
マサチューセッツ工科大学火星教室（アメリカ）、グリニッジ天文台（イギリス）、
ストラスブール天文台・プラネタリウム・研究室（フランス）。

頻 度：年に3回～6回 2002年12月～2011年11月、50回を越えるか？

指 導：家族単位で集まっているので専門家は存在せず、天文台や科学館の専門家に直接交渉したり、
天文台や科学館の特別なイベントに参加して指導を受ける。



「Star Kids りかキャンプ」から次の君天やジュニアセッション参加者

2005年1月にはStar Kidsの活動を始めて3年目になり、集う地域も子どもたちも増え、「りかキャンプ」として西はりま天文台で3泊4日の長期のイベントを計画し出した。参加者の多くは望遠鏡を初めてのぞく人たちで、もちろん天文につながりのなかった人たちである。りかキャンプから帰った子どもたちは地域の図書館の天文関係の図書を棚ごとすべて読んでいたり、作って持ち帰ったコルキット（4センチ手作り望遠鏡）を用いて自宅で月を観測しだした。

何回か参加するうちに、「月は太陽の光を受けて輝いているのはわかるけど、惑星は同じ太陽の光を受けているのになぜみんな違う色をしているんだろう？」と疑問を持つ小学生や「野鳥の渡りにおいて鳥は星空も認識しているのだろうか？」と真剣に考え出す子どもたちが現れた。



日本天文学会ジュニアセッション発表
2003年「銀河の種族分けと分布」東北大学
2003年「GoodJob 天文学を目指して」名古屋大学
2006年 和歌山大学へ発表見学
2007年「星の色について」東海大学
君が天文学者になる4日間参加
2002年「銀河の種族分けと分布」国立天文台三鷹
2009年「星の一生と散開星団の関係」星の子館
天文教育普及研究会年会で発表
2006年「星空リピーターStarKidsの挑戦」
西はりま天文台のコロキウムでも発表練習をさせていただいた。

NHAO@プログラムが始まってからは宿泊日程が決めやすくなった。

「OSETI」地球外生命探し、初回から参加（呼んでいただいた）

「アンドロメダ銀河の大きなポスターづくり」

「超新星探し」

「ホームズ彗星のアウトバーストの原因にせまる」

「NHAO-3Dプロジェクト」

などに多数回参加。

研究員の観測に呼んでいただく機会があったことも子どもたちにはまたとないビッグプレゼントだった。特に彗星観測に数度、「StarKids が来てるなら」と声をかけていただいたのが嬉しい思い出。叱られることもあったが暖かく感性を育てていただいた。大きい子どもたちは活動範囲を広げ、その時々呼びかけ人が違って新たな展開をみせている。

プラネタリウムで「君たちも僕たちといっしょにALMAを作りましょう！」との呼びかけにクラフトのALMA電波望遠鏡を数十基作り続けた8歳君も15歳、土星を見て、「ドーナツの中にお団子がー」と叫んだ6歳君も中学生、1日で望遠鏡操作を覚えお母さんたちに次々に星を入れて見せていた11歳君も大学受験生。旅行の時には望遠鏡持参で回りを巻き込む才能を発揮できるStarKidsに成長した。これから続く子どもたちにもしっかり手渡しって欲しい。



10年近く、多いに関わり、次の発展につながるように育ててくださった西はりま天文台研究員の方々に深く感謝しています。